教育研究業績書

2025年05月07日

所属： 看護学科　　資格： 講師　　氏名： 梶原　友美

研究分野	研究内容のキーワード
精神看護学	精神科救急急性期、精神看護、主体性、パーソナルリカバリー
学位	最終学歴
修士(看護学)	神戸大学大学院保健学研究科パブリックヘルス領域 修了見込

教育上の能力に関する事項		
事項	年月日	概要
1 教育方法の実践例		
1.看護研究方法論関連の講義(90分×1コマ)	2023年1月	神戸大学医学部保健学科看護学専攻の3年生約40名を対象に「看護研究方法論」の1コマを他の教員1名と一緒に担当した。授業内容は、課題論文について、グループ毎にディスカッションを通したクリティークであった。学生の発表時には、学生のクリティーク結果について、更に深めることと、自ら研究を実施し、行うための方法を明確に出来るよう、質問を投げかけ、助言を行った。
2.看護実践展開実習Ⅰ（精神）	2022年10月~2022年12月	神戸大学医学部保健学科看護学専攻の3年生約40名に対して医学部附属病院において実習指導を行った。 大阪大学での実習の工夫に加え、ロールプレイ演習を行うことで、学生が自分のコミュニケーションの特徴に気付くこと、患者役の意見を通して、自らの言動が他者に与える影響を考えることを促した。
3.精神看護学関連の講義「精神看護援助論演習」(各90分/回)(精神障害とリカバリー,統合失調症者の看護，精神疾患を持つ人の看護過程の展開×2コマ，精神科救急・急性期における看護)	2013年4月~2024年3月	大阪大学医学部保健学科看護学専攻3年生約80名を対象に「精神看護援助論演習」のうち、左記の講義を担当した。 「精神障害とリカバリー」では、学生がリカバリーの概念を知り、自らの実践に活かす方法を見つけることを目的とした。具体的には、リカバリー概念が生まれた背景や近年の研究の動向を伝えると共に、リカバリーを促進するとされる援助を紹介した。特にWRAPに注目し、学生自身がリカバリーを一部体験できるよう工夫した。課題では、書籍やインターネット等から、リカバリーストーリーをひとつ選び、その概要の説明と学び、自らの実践に活かす方法を具体的に考えることで、多様なリカバリーをどのように支援するかを考えることを支援した。 「統合失調症者の看護」では、統合失調症者の体験に基づき、求められる看護を考えることを目的とした。具体的には、阿保(2012)の統合失調症者の精神構造モデルをもとに、自我機能の変化とそれに伴い、出現する客観的症状を示した。また、精神障害をもつ人の手記を用い、自我機能の変化に伴う患者の主観的体験を伝えることで、実際に求められる看護を患者の視点から検討することを促した。 「精神疾患を持つ人の看護過程の展開」では、2回の講義を担当した。1回目の講義では、精神看護学実習でアセスメントに用いるWHOの国際生活機能分類（ICF)について講義し、2回目の講義に用いるペーパーペイシェントの説明を行った。2回目の講義までの課題として、学生には、情報収集とアセスメント、日々の計画について記録を完成させることと、完成させるにあたっての疑問点を記載させた。2回目の講義までに、教員が一人一人の記録を添削することで、より学生のニーズに基づいた講義を行うことに務めた。 「精神科救急・急性期における看護」では、自らの勤務経験を活かし、精神科医療における精神科救急・急性期病棟の役割とその看護の特徴について講義を行った。精神科医療の地域移行に基づき、精神科救急・急

教育上の能力に関する事項		
事項	年月日	概要
1 教育方法の実践例		
		性期病棟の重要性を教示すると共に、安全確保や早期の医療介入が求められる一方、意に反した入院や治療が時に患者にとってネガティブな体験につながるリスク、看護師にとっても葛藤が生じ得る状況を具体的な事例を用いて説明した。
4.精神看護学関連の講義「精神保健看護学」(プロセスレコード(2014～2017年度、2020年度、2021年度、2022年度(招へい))、補完代替医療の講義(2018年度、2020年度))	2013年4月~2023年3月	大阪大学医学部保健学科看護学専攻3年生約80名を対象に「精神保健看護学」のうち、左記の講義を行った。 「プロセスレコード」では、実際の実習での事例を用い、違和感を感じる場面を抽出し、自分ならどのように考え、どう対応するか、知覚、思考、感情を振り返り、行為を改善していく過程を具体的に学べるよう工夫した。また、講義後の課題で、実際の社会生活における相互作用で気になった場面をあげ、プロセスレコードを用いて振り返りをさせ、それぞれの課題に対し、フィードバックを行うことで、学びを深めるサポートを行った。 「補完代替医療」では、その背景や知識を得、セルフケアに用い、ケアの選択肢を広げることを目的とした。具体的には、講義後、学生に日常に取り入れられる補完代替療法をひとつ選択させ、実施計画を立て、その効果や実施の障壁等を振り返らせ、実際にケアとして用いる際の注意点や支援方法を具体的に考える機会とした。
5.特別研究(卒業論文)指導	2013年4月~2022年3月	大阪大学医学部保健学科看護学専攻3年生～4年生を対象に特別研究(卒業論文)指導を行った。2013年度は2名、2014年度以降は各学年1名ずつの指導を行った。研究内容は、インタビュー調査、文献検討、書籍の分析等があった。 特別研究のゼミは、精神保健看護学教室3名の教員とその担当学生で行った。ゼミの中で、左記の講義を担当した。 「看護研究とは何か」では、看護研究への導入として、看護研究とは何か、論文の構成、テーマの絞り込み、研究のタイプ、クリティークの視点等の講義を担当した。講義の内容と学生の研究疑問を結び付けて検討することで、学生が研究を具体的に進めていく方法につなげた。
6.看護研究方法論関連の講義(90分×1コマ)	2013年4月~2022年3月	大阪大学医学部保健学科看護学専攻3年生約80名を対象に「看護研究方法論演習」の1コマを他、同領域の教員2名と共に担当した。授業内容は、精神保健看護学研究室で行っている研究の紹介と、研究テーマの絞り込みプロセスについての講義であった。実際に学生には、テーマの絞り込みプロセスに基づき、自らの関心に基づいた具体的なテーマを考えさせ、卒業研究の準備段階を支援した。
7.統合看護実習Ⅱ	2013年4月~2022年3月	大阪大学医学部保健学科看護学専攻4年生。大学病院と地域の訪問看護ステーションをもつNPO法人における実習を通して、これまでの知識や技術を統合し、臨床現場で実際に勤務することを想定した実習を行った。具体的には、看護師のシャドウィングを通して、複数の患者を受け持ち、多職種や複数の看護師との協働の中で働く体験を行った。また、看護管理の視点を学び、実践につなげられるようサポートした。また同時に地域での支援を体験することで、地域と病院の中での連続性を意識した学びが提供できるよう工夫した
8.統合看護実習Ⅰ	2013年4月~2022年3月	大阪大学医学部保健学科看護学専攻3年生を対象に、精神科単科病院への見学実習と現場看護師とのディスカッションを通して、学生がこれまでに学んだ知識の統合と、具体的な実践について検討することを支援し

教育上の能力に関する事項		
事項	年月日	概要
1 教育方法の実践例		
		た。
9.精神看護学実習	2013年4月~2022年3月	大阪大学医学部保健学科看護学専攻の3～4年生それぞれ約40名に対して、医学部附属病院において実習指導を行った。 実習指導では、教員が答えを示すのではなく、学生自身が気づき、体験から学びを得ることが出来るように時間をかけて対話を行うことを心掛けた。また、毎日のカンファレンスでは、実習をすすめていくことで悩んだことや疑問に基づき学生自身にテーマを決めさせ、学生主体で運営させることで、学生の主体的な学びにつなげた。
10.情報関連の講義 ・Word 文書作成(図形・画像)90分×1(2013年度、2014年度、2015年度、2016年度、2018年度) 情報のデジタル化とコンピューティングの要素と構成 90分×1（2020年度、2021年度）	2013年4月2022年3月	大阪大学医学部保健学科看護学専攻1年生を対象に左記の講義を実施した。 「Word 文書作成(図形・画像)」では、Wordの使い方の中で、特に図形・画像の挿入方法を学ぶことを目的とした。講義内で複数の課題を出し、一緒に作業をすることで、PCの不得手な学生にとっても実践に繋げることを目指した。更に、インターネット上のイラストや図を使用する際の注意点を伝えた。また、講義後、課題として、自身のレポートに図形や画像を挿入して提出させることでその理解を確認した。 「情報のデジタル化とコンピューティングの要素と構成」は全学部で共通した講義資料をもとに、講義を行った。具体的にネットワークの仕組みについて、ネットワークとは何か、またどのようにネットワークが構成され、通信しているのか、その概要を解説した。またネット詐欺の事例を紹介し、注意喚起を行うと共に、安全な通信のためのSSL/TLS通信について説明した。この講義では、講義前にe-learningを用い、学生自身に学習をさせることで、学びを深めた。特に2021年度は看護学専攻において、看護学専攻における講義のとりまとめを担当し、講義の担当教員の調整やTAの調整を行った。また、講義だけでなく、ガイダンスや試験監督も行った。
2 作成した教科書、教材		
1.梶原友美，武用百子．教育VRキット「Medi-EYExVR」（シナリオ作成）	2023年	うつ病患者の事例とシナリオを作成した。また撮影に同行し、演技に対する助言を行った。
2.梶原友美，武用百子．教育用電子カルテ「Medi-EYE」（事例作成）	2023年	慢性統合失調症者の事例を作成した。
3.梶原友美 第2部 第1章 統合失調症の看護 Section Ⅱ事例：10代の大学生で初めて発症して入院した統合失調症患者p.251-274.遠藤淑美，末安民生 編 新版 精神看護学 中央法規	2020年	統合失調症の看護事例として、10代大学生の初発患者の事例について執筆した。
4.梶原友美 第5章－2 初回入院が医療保護入院になった患者P142-152,遠藤淑美ほか編，統合失調症の看護ケア.中央法規	2017年	初回入院が医療保護入院になった10代の統合失調症患者の事例について執筆した。
5.遠藤淑美，梶原友美 第4章 精神障害をもつ人と「患者-看護師」関係の構築 Ⅲ精神障害をもつ人との関係の振り返り 渡邉博幸、岩崎弥生 編 新体系看護学全書 精神看護学②精神障害をもつ人の看護(第4版)，メヂカルフレンド社	2016年~	振り返ることの意味、プロセスレコードについて、記述した。その後第5版、第6版の改訂に携わり、第6版改定時には、まとめノートの監修にも携わった。
3 実務の経験を有する者についての特記事項		
1.精神看護学実習のTA	2023年9月~12月	神戸大学医学部保健学科看護学専攻3回生を対象にティーチングアシスタントとして精神看護学実習の指導サポートを行った。
2.精神看護学実習のTA	2011年~2012年	大阪大学医学部保健学科看護学専攻3～4改正を対象にティーチングアシスタントとして精神看護学実習の指導のサポートを行った。
4 その他		

職務上の実績に関する事項		
事項	年月日	概要
1 資格、免許		
1.看護師免許証 2.保健師免許証	2008年5月 2008年5月	第1468725号 第159966号
2 特許等		
3 実務の経験を有する者についての特記事項		
1.神戸大学大学院保健学研究科精神看護学領域育休代替	2022年10月~2023年1月	上述した講義や実習以外に、大学入学共通テストの警備に携わった。
2.阪大学大学院医学系研究科保健学専攻精神保健学教室，招へい教員	2022年4月~現在	講義以外に、精神保健学教室のゼミに参加し、ディスカッションを行っている。また、「精神医療学」のファシリテーターを行った。
3.大阪大学大学院医学系研究科保健学専攻精神保健看護学教室　助教	2013年4月~2022年3月	上述した講義や実習以外に、「精神医療学」の運営、「成人医療学Ⅰ」の運営とグループワークとディスカッションのファシリテートを行った。 学科内において、感染対策委員会(2021年度)、総合医療実習室委員会(2019年度、2020年度)、情報ネットワーク委員会(2016年度)の委員を務めた。また、専攻内において、実習ワーキング(2015年度～2017年度、2020年度)において、実習オリエンテーションの司会運営と統合実習１の企画、とりまとめ、精神看護学領域と他領域の連絡調整を行った。実習室ワーキング(2013年度、2014年度、2018年度、2019年度、2021年度)では、実習室の物品管理を行った。その他、講座内業務として居室関係の整備や講座費用の管理、TAのとりまとめ等を行った。 また、入試業務として、大学センター試験、前期入試、後期入試の試験監督と警備を行った。 オープンキャンパスでは、看護と精神保健看護学教室に関心を持ってもらうため、概要の説明と、セルフケア体験として呼吸法と芳香浴を行った。
4.社会医療法人北斗会さわ病院　精神科救急病棟　看護師	2008年4月2011年3月	統合失調症や気分障害、人格障害、認知症といった患者の看護に携わった。
4 その他		

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
1 著書				
1.エビデンスに基づく看護実践のためのシステマティックレビュー	共	2013年12月	日本看護協会出版会	牧本 清子 編　秋田友美 Web公開版,精神科看護における身体拘束のEBP. を執筆した。精神科看護における身体拘束の現状と、効果・安全性に対するエビデンス、エビデンスに基づいたガイドライン、この領域における課題についてまとめた。 https://jnapcdc.com/sr/chapter-iii-%E2%91%A3.html
2 学位論文				
1.精神科救急病棟における非自発的入院患者の 治療拒否に対する看護援助の実際	単	2013年3月	大阪大学大学院医学系研究科保健学専攻 博士前期課程修士(看護学)	非自発的入院場面の参加観察に基づき、各場面を構成する看護師、患者各5名に半構造化インタビュー調査を行った。(3.学術論文の6を参照)
3 学術論文				
1.攻撃行動により入院となった神経発達障害群患児に対する看護ケア―看護師への半構造化インタビュー―.(査読付)	共	2024年6月	日本精神保健看護学会誌 33(1) 78-87	[著者]加藤 有花，梶原 友美，山崎 あけみ，菊池 良太，川原 妙，遠藤 淑美. 攻撃行動により地域生活を送ることが困難となり児童思春期精神科病棟に入院となった神経発達障害群患者に対する看護を明らかにするために，児童思春期精神科病棟に3年以上勤務する看護師8名に半構造化インタビューを行った．分析の結果，【看護師や入院生活への安心安全感を与える】【攻撃行動時の状況や気持ちについて振り返りを促す】【攻撃行動の不適切さや不利益さを理解することで行動変容の動機づけを促す】【動機づけ後に行動変容に向けて具体的な行動目標を自ら考えられるように促す】【行動変容の目標を達成

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
3 学術論文				
				できるように適切な行動の定着を促す】の5つのカテゴリーが見出された.
2.Recovery-oriented daily care practice for community-based mental health service consumers in Japan: A grounded theory approach.(査読付)	共	2023年6月	International journal of mental health nursing 32(3), 854-865.	[著者]Matoba K, Buyo M, Odachi R, Kajiwara T, Endo Y. 日常ケアの中で行うリカバリー志向実践を明らかにする多恵に、看護師、作業療法士、精神保健ソーシャルワーカー（合計17名）を含む日本の精神保健専門家のリカバリー志向の実践を半構造化インタビューを通じて調査した。グランデッドセオリーを用いて分析した結果、「利用者の独自の生活のニーズを満たすためにケアを調整し続ける」を中核カテゴリーとする6つのカテゴリーが抽出された。
3.The Big Five personality traits and the fear of COVID-19 in predicting depression and anxiety among Japanese nurses caring for COVID-19 patients: A cross-sectional study in Wakayama prefecture.(査読付)	共	2022年10月	PLoS ONE 17(10): e0276803.	[著者]Odachi R, Takahashi S, Sugawara D, Tabata M, Kajiwara T, Hironishi M. Buyo M. COVID-19への恐怖とビッグファイブの性格特性から予測される看護師のうつ病と不安のリスクを調査することを目的とした。和歌山県でCOVID-19患者のケアにあたる病院に勤務する合計417人の看護師を対象に、COVID-19恐怖尺度、ビッグファイブ性格特性尺度、hospital anxiety and depression scale (HAD)日本語版を用いて調査した。うつ症状に関連する有意な因子は神経症傾向のみであり、不安に関連する有意な因子は、COVID-19恐怖尺度得点と神経症傾向の両者であった。
4.精神疾患患者にアロママッサージを行った看護師のストレス状態と気分状態に生じる変化.(査読付)	共	2021年5月	日本統合医療学会誌 14(1);24-31	[著者]梶原友美，遠藤淑美 精神科病棟において、1年間、身体面から働きかける補完代替療法（以下CAM）をケアに取り入れた際、看護師に生じる変化を明らかにすることを目的に、CAM導入の初回、1ヶ月後、6ヶ月後、1年後において、CAMを実施した看護師の実施前後のストレス状態（唾液アミラーゼ値）と気分状態（POMS2短縮版）を比較した。4施設5病棟の看護師10名が対象となった。POMS2短縮版において、ネガティブな気分状態を測定する各尺度の平均値は全ての測定時期で低下したものの、唾液アミラーゼ値は、初回、1ヵ月後のみ低下し、6ヵ月後、1年後は増加した。
5.Self-harm and Suicide Attempts in a Japanese Psychiatric Hospital.(査読付)	共	2018年3月	East Asian Archives of Psychiatry. 28 (1)23-27	[著者]Tanimoto C,Yayama S,Suto S,Matoba K, Kajiwara T, Inoue M,Endo Y, Yamakawa M, Makimoto K. 日本の精神病院における自傷行為と自殺未遂の状況を分析することを目的に日本の精神科病院のインシデントレポートを分析した。研究期間中、58 人の患者が関与する 90 件の自傷および自殺未遂が報告された。自傷および自殺未遂の発生率は 1000 患者日あたり 0.05 件であった。自傷および自殺未遂の種類には、首つり（n = 25)、リストカット（n = 19)、異物摂取（n = 17)、その他（n = 29）などがあった。関連データのある 55 人の患者のうち、最も一般的な臨床診断は気分障害（41.8%）で、次いで統合失調症（36.4%）であった。
6.精神科救急病棟における看護師と患者の視点からみる非自発的入院初期の看護援助(査読付)	共	2017年12月	日本看護科学会誌 37；308-318	[著者]梶原友美，遠藤淑美 精神科救急病棟への非自発的入院初期の看護援助に対する認識を看護師，患者の視点から明らかにすることを目的に、非自発的入院場面の参加観察に基づき、各場面を構成する看護師、患者各5名に半構造化インタビュー調査を行った。質的統合法(KJ法)を用いて分析した。看護師の認識は9枚のラベルに分類され，【暴力につながり得るリスクの排除】の一方，【意に反した中でなんとか行う患者の意に沿う援助】といった論理構造となった．患者の認識は6枚のラベルに分類され，【入院時の理不尽な対応への怒りとあきらめ】の一方，【治療の受け入れにつながる患者の立場に立った関わり】といった論理構造となった.
7.Analysis of inedible substance	共	2017年9月	Psychogeriatics 17(5) 292-299	[著者]Yayama S, Tanimoto C, Suto S, Matoba K, Kajiwara T, Inoue M, Endo Y, Yamakawa M, Makimoto K.

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
3 学術論文				
ingestion at a Japanese psychiatric hospital.（査読付）				日本のひとつの精神科病院において、2000年から2012年にかけて発生した異食の発生率について、インシデントレポートより分析した。発生率は 1000 患者日あたり 0.09 で、145事例105人の患者が異食が報告された。最も多いのが認知症、次いで統合失調症であった。
8.精神科看護における補完代替療法への関心と活用の実態 ： 精神科入院施設看護管理者への全国調査(査読付)	共	2016年3月	大阪大学看護学雑誌22(1);1-9	[著者]梶原友美，的場　圭，石川かおり，神里みどり，遠藤淑美 精神科入院施設における補完代替療法(Complementary & Alternative Medicine:以下CAMとする)に対する看護管理者の関心と活用の現状を知り、普及のための課題について検討することを目的に、日本精神科病院協会に所属する精神科病院および精神病床を有する病院1206施設の看護管理者を対象に郵送による自記式質問紙調査を実施した。383施設より回答があり(回収率32%)、CAMを導入している施設は46.2%であった。導入していない施設と導入している施設との間でCAMへの関心の高さに差はなく、アロマテラピー(44.4%)とアニマルセラピー(39.9%)の関心が高かった。CAM導入の有無に関わらず、導入のために検討すべき条件は「専門的知識の習得」であった。
その他				
１．学会ゲストスピーカー				
２．学会発表				
1.総合病院に転院した身体合併症をもつ精神疾患患者へのケアにおける、身体科看護師の経験とニーズ：インタビュー調査.(査読付)	共	2024年6月	日本精神保健看護学会第34回学術集会	[著者]千葉理恵，梶原友美，廣田美里，知花文香，市川綾乃，木戸芳史，林佑太，谷口麻希，野津美由紀，彼谷哲志. 精神科病院から総合病院に転院した身体合併症をもつ精神疾患患者へのケアに際して、総合病院の身体科看護師が経験している困難・行っている対応、感じているニーズを明らかにすることを目的に16名の看護管理者と看護師に半構造化インタビューを行った。精神科病院からの転院時、入院中、精神科病院への転院時にそれぞれ困難、行っている対応、ニーズが明らかになった。
2.Characterizes of the Relationship Between Nursing Students and Clinical Practicum Instructors - Analysis with RIAS and Theory U.（査読付）		2024年4月	27thEAFONS	[著者]Endo Y., Ishikawa K., Kajiwara T. 実習指導者の視点から学生とのやりとりの特徴を明らかにすることを目的に、実習指導者が記載した11の指導場面のプロセスレコードをRIASとU理論を用いて分析した。学生がポジティブな変化を示した5場面において、指導者の意識は自身の考えから、学生の見解についての共感に変化した。一方、学生がネガティブな変化を示した6場面では、指導者は学生の考えを引き出すよりも自分自身の考えに焦点をあてていた。
3.Important Factors for Inpatients to Feel Personal Agency in Acute Psychiatric Care Settings: A Qualitative Study.（査読付）	共	2024年4月	27thEAFONS	[著者] Kajiwara T., Hayashi Y., Chiba R. 精神科急性期医療において、入院患者が主体性(パーソナルエージェンシー)を感じるために何が重要であるかを説明するために、12名の精神科急性期病棟入院経験者にフォーカスグループインタビューを行った。この研究は、4人の精神疾患経験者との協働により実施した。
4.Analysis of reports of violence received by nurses from patients in Japanese psychiatric hospital.(査読付)	共	2023年1月	26thEAFONS	[著者]Yayama S., Matoba K., Kajiwara T., Saito Y., Teshima T., Miki A. 日本の精神科病院における患者から看護職が受ける暴力が頻発する時期、時間、場所、状況等を明らかにすることを目的に7年間の暴力報告書(975件)の分析を行った。身体的暴力が696件（71.3%）、精神的暴力94件（9.6%）、性的暴力64件（6.6%）であった。
5.成人の精神病者に対する理解や支援の文脈で言及される主体性についての概念分析(査読付)	共	2022年12月	第42回日本看護科学学会学術集会	[著者]梶原友美,大達 亮,的場 圭,武用百子. 国内の先行研究、資料、書籍から精神病者の理解や支援の文脈で言及される主体性概念を明らかにすることを目的とし、医学中央雑誌Web版ver.5およびCiNiiを使用し、文献を抽出し、主体性の概念分析を行った。15件の文献を分析し、環境と相互に関わり合いながら他

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
２．学会発表				
				ならぬ自分として目標や価値に基づき行動する/行動できると感じることが属性として明らかになった。
6.A 病院における7 年間の患者から看護職が受けた暴力報告書の内容の分析 ～ 5 回以上提出のあった暴力事例をもとにした対策の検討～(査読付)	共	2022年6月	日本精神保健看護学会第32回学術集会	[著者]矢山 壮，的場 圭，梶原友美，斎藤雄一，手嶌大喜，三木明子 A病院における7年間で5回以上暴力を報告している看護職の特徴や暴力発生時の状況を明らかにすることを目的に暴力報告書の分析を行った。暴力報告書975件を報告した373名の看護職のうち、5回以上報告している看護職は51名であった。
7.Nursing Practice for Patients with Neurodevelopmental Disorders Admitted due to Aggressive Behavior in a Child and Adolescent Psychiatric Unit(査読付)	共	2022年4月	25thEAFONS	[著者]Kimura Y, Kajiwara T, Yamazaki A, Kikuchi R, Kawahara T, Endo Y. 攻撃行動により入院となった神経発達障害群患者に対してどのような看護が提供されているかを明らかにすることを目的に、児童思春期精神科病棟で3年以上勤務している看護師に半構造化インタビューを行った。「入院生活に安心安全を感じられるように関わる」「攻撃行動後にその時の状況や気持ちについて振り返りを促す」「攻撃行動を振り返る中で行動修正の必要性について理解を促す」といった7つのカテゴリが抽出された。
8.Practices for supporting patients' personal agency in psychiatric emergency/acute settings in Japan: a grounded theory approach(査読付)	共	2022年4月	25thEAFONS	[著者]Kajiwara T, Odachi R. Buyo M. 患者の主体性(パーソナルエージェンシー)を支えるためにどのような実践を行っているかを明らかにするために、精神科救急/急性期病棟に勤務する13名の医療者(医師3名、看護師7名、精神保健福祉士2名、臨床心理士1名）を対象に半構造化インタビューを行った。精神科救急/急性期に患者の主体性を支援するために【患者が自尊心と自己統制間を取り戻し、希望を持つことを支援する】という中核カテゴリーが明らかになった。
9.Changes in nurses and patients caused by continuous use of aromatherapy in psychiatric wards (査読付)		2019年8月	AAPINA&TWNA Joint International Conference	[著者]Endo Y.,Kajiwara T.,Ishikawa K. 精神科病棟でのアロマセラピーの使用と、2つの病院に所属する精神科看護師の1年間の状態を判断し、患者と看護師に生じる変化を調査することを目的に、アロマセラピーを実施した看護師とその支援を行った看護管理者にインタビュー実施した。インタビューは、1年間のフォローアップ調査中、1ヵ月に1回訪問して実施した。
10.精神科看護において患者にアロママッサージを行った看護師に生じる心理的・生理的効果の検証(査読付)	共	2018年10月	第22回日本統合医療学会学術大会	[著者]梶原友美,遠藤淑美 精神科病棟において、1年間、身体面から働きかける補完代替療法（以下CAM）をケアに取り入れた際、看護師に生じる変化を明らかにすることを目的に、CAM実施前後のストレス状態（唾液アミラーゼ値）と気分状態（POMS2短縮版）を比較した。(学術論文の4.)
11.精神科急性期治療病棟を3か月以内に退院した患者の経験：退院後6か月以内の再入院の有無による経験の違い.(査読付)	共	2017年12月	第37回日本看護科学学会学術集会	[著者]川﨑絵里香，梶原友美，井上万寿美，的場 圭，遠藤淑美 精神科急性期治療病棟を3か月以内に退院した患者の経験を明らかにし、更に退院後6か月以内の再入院の有無による経験の違いを検討することを目的に、7名の患者に半構造化面接を行った。
12.Developing a method of introducing complementary and alternative medicines in psychiatric nursing practice: Providing knowledge, skills,	共	2017年10月	TNMC & WANS International Nursing Research Conference	[著者]Endo Y, Kajiwara T, Kawasaki E, Ishikawa K, Hayashi H, Kamizato M 補完代替療法(CAM)の技術と知識を向上させることを目的とした教育ワークショップと、CAMを臨床に導入することを目的としたフォローアップの効果について明らかにするために、ワークショップ参加者(10施設23名の看護師)へのフィードバックアンケートを実施した。ワークショップを通じて、21人の看護師（91.3%）がCAMを活用できると感じ、10施設中4施設がフォローアップを希望した。

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
２．学会発表				
and resources(査読付)				
13.Developing nursing care guidelines to balance patient autonomy and effective treatment during involuntary hospitalization(査読付)	単	2016年3月	19thEAFONS	[著者]Kajiwara T. 38件の文献レビューにより、精神科救急急性期病棟への非自発的入院や治療に対する患者の認識と看護師の認識を明らかにし、専門家へのフォーカスグループインタビューを踏まえ、援助指針を作成した。9つの看護援助が抽出された。
14.精神科看護における補完代替療法への関心と活用の実態―看護管理者への全国調査から(査読付)	共	2015年12月	第19回日本統合医療学会	[著者]遠藤淑美、梶原友美、的場圭、石川かおり、神里みどり 精神科入院施設における補完代替療法(CAM)に対する看護管理者の関心と活用の現状を知り、普及のための課題について検討することを目的に、1206施設の看護管理者を対象に郵送による自記式質問紙調査を実施した。(学術論文8)
15.精神科救急病棟で実施される集団心理教育の地域生活での活用～統合失調症者の生活体験を通して～(査読付)	共	2015年12月	第35回日本看護科学学会学術集会	[著者]的場 圭、梶原友美、井上万寿江、遠藤淑美 精神科救急病棟入院中に集団心理教育を受けた統合失調症者が、退院後の生活において心理教育での体験をどのように活用しているかを明らかにすることを目的に統合失調症者4名を対象に、退院後の初回外来時、2回目の外来時に半構造化面接を実施した。
16.Nursing student’s reactions to a healing touch program within mental health education(査読付)	共	2015年10月	The 4th International Nursing Research Conference of World Academy of Nursing Science (The 4th WANS)	[著者]Matoba K, Yayama S, Tanimoto C, Kajiwara T, Inoue M, Suga S, Suto S, Endo Y, Yamakawa M, Makimoto K. 日本のある精神科病院における12年間のインシデントレポートの分析より、誤薬の事象について分析を行った。
17.Long-term trend of medication errors in a Japanese psychiatric hospital (査読付)	共	2015年10月	The 4th International Nursing Research Conference of World Academy of Nursing Science (The 4th WANS)	[著者]Matoba K, Yayama S, Tanimoto C, Kajiwara T, Inoue M, Suga S, Suto S, Endo Y, Yamakawa M, Makimoto K. 日本のある精神科病院における12年間のインシデントレポートの分析より、誤薬の事象について分析を行った。
18.Analysis of incident reports of absconding behavior at a Japanese psychiatric hospital over a 12-year period(査読付)	共	2015年10月	The 4th International Nursing Research Conference of World Academy of Nursing Science (The 4th WANS)	[著者]Kajiwara T, Yayama S, Tanimoto C, Matoba K, Suga S, Inoue M, Suto S, Endo Y, Yamakawa M, Makimoto K 日本のある精神科病院における12年間のインシデントレポートの分析より、離院の事象(155件/5163件)について分析を行った。離院率は1000患者日あたり0.10件で、2005年の0.04件から2009年の1.6件まで推移した。
19.Nursing student’s reactions to a healing touch program within mental health education(査読付)	共	2015年9月	The 21st International Network for Psychiatric Nursing Research conference	[著者] Endo Y, Kajiwara T, Inoue M, Ishikawa K. ヒーリングタッチプログラムを受講した看護学生の反応を明らかにするために、アンケート調査を実施した。
20.Analysis of pica behaviors by disorder observed in a Japanese psychiatric hospital.(査読付)	共	2015年2月	18thEAFONS	[著者]Yayama s.,Tanimoto C.,Kajiwara T.,Matoba K., Suto S., Inoue M., Endo Y., Yamakawa K.,Makimoto K. 日本のひとつの精神科病院において、2000年から2012年にかけて発生した異食の発生率について、インシデントレポートより分析した。(学術論文7)
21.The effectiveness of psychoeducation	共	2014年11月	The 9th Biennial Joanna Briggs	[著者]Matoba K, Kajiwara T, Endo Y.Makimoto K. 「初回エピソード精神病の患者(FEP患者)に対する心理教育プログラ

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
２．学会発表				
program for patients with first episode psychosis: A systematic review protocol.（査読付）			Colloquium	ムは、通常のケアを受けている患者と比較して転帰の改善に効果的か?」をレビュー質問とし、レビュープロトコルを作成した。（総説2.）
22.精神科病院のインシデントレポートにみられた患者によるスタッフへの暴力と患者への暴力の比較.（査読付）	共	2014年11月	第34回日本看護科学学会学術集会	[著者]矢山 壮，谷本千恵，梶原友美，的場 圭，周藤俊治，樋上容子，井上万寿江，遠藤淑美，山川みやえ，牧本清子. スタッフへの暴力と患者への暴力それぞれの特徴を明らかにすることを目的に、A病院で2000年から2012年の13年間にわたる暴力のインシデントレポートを調査した。暴力の発生率は、0.20/1000患者日であった。スタッフへの暴力が0．06／1000患者日（109件)、患者への暴力が0．11／1000患者日（191件）であった。
23.精神科救急急性期における非自発的治療や入院に対する患者の認識：文献レビュー(査読付)	単	2014年11月	第34回日本看護科学学会学術集会	[著者]梶原友美 文献レビューにより、精神科救急急性期病棟への非自発的入院や治療に対する患者の認識を明らかにした。抽出された24件の文献から、肯定手的な体験(5カテゴリー)と否定的な体験(7カテゴリー)が抽出された。
24.精神科救急病棟における非自発的入院患者の治療拒否に対する看護援助の実際(査読付)	単	2013年12月	第33回日本看護科学学会学術集会	精神科救急病棟における入院初期の看護援助の実際を看護師－患者両者の視点から明らかにすることを目的に、入院場面の参加観察を踏まえた患者看護師への半構造化インタビューを行った。(学術論文の6.)
25.The reality of nursing care for involuntarily hospitalized patients.(査読付)	共	2013年5月	2nd European Conference Mental Health Nursing.	[著者] Akita T, Endo Y. 精神科救急病棟における入院初期の看護援助について患者の認識を明らかにするため、非自発的入院者への半構造化インタビューを行った。
26.Cognitive behavioural therapy(CBT) in managing positive symptoms of schizophrenia in Japan: A literature review.（査読付）	共	2012年2月	15thEAFONS	[著者]Akita T, Shimmitsu S 統合失調症者の陽性症状を管理するために実施されている認知行動療法(CBT)について22件の国内文献のレビューを行った。1998年から研究が開始され、症例研究が20件、無作為化比較試験が2件であった。
３．総説				
1.The effectiveness of psychoeducation programs following first episode psychosis: a systematic review protocol.(査読付)	共	2016年12月	JBI Database of Systematic Reviews and Implementation Reports (14)12; 56-63	[著者]Matoba K, Kajiwara T, Endo Y.Makimoto K. 「初回エピソード精神病の患者(FEP患者)に対する心理教育プログラムは、通常のケアを受けている患者と比較して転帰の改善に効果的か?」をレビュー質問とし、レビュープロトコルを作成した。参加者は、ICD-10あるいはDSM-III-Vの統合失調症スペクトラム障害、気分障害、または特定されていない精神障害と診断された患者、介入は、FEP 患者に対する心理教育プログラム、メインアウトカムは、介入後の 1 年間の再発率、副次的アウトカムは、治療遵守、病気とその治療に関する知識レベル、生活の質とした。研究の種類は、ランダム化比較試験、非ランダム化比較試験、準実験的前後研究など、あらゆる実験研究デザインとした。
４．芸術（建築模型等含む）・スポーツ分野の業績				
５．報告発表・翻訳・編集・座談会・討論・発表等				
1.統合失調症者の主介護者のニーズ、課題、対処戦略：システマティックレビューとメタ統合.千葉理恵編. 海外の精神障害リハビリ	共	2024年11月	精神障害とリハビリテーション28(2)	[著者]千葉理恵，梶原友美，中村英輝，廣田美里. 海外の精神障害リハビリテーション研究の紹介において、梶原はIssac et al.(2022)のNeeds,challenges, and coping strategies among primary caregivers of schizophrenia patient: A systematic review & meta-synthesisの要約と解説を行った。

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
５．報告発表・翻訳・編集・座談会・討論・発表等				
テーション研究の紹介「精神疾患をもつ人の家族への支援」.				
2.ダイアロジカル・スーパービジョン――リフレクションを活用した職場文化のつくりかた. Alhanen K., Kansanaho A., Ahtiaine O-P., Kangas M, Lehti K., Soini T. & Soininen J.(2020) Dialogical supervision - creating a work culture where everybody learns.	共	2024年10月	遠見書房	翻訳者：梶原友美,川田美和 翻訳担当個所 第5章 スーパービジョンを実施する際の条件 第6章 オリエンテーション 第7章 アクション・メソッド
3.精神疾患をもつ人におけるレジリエンスと、レジリエンスを支える関わり	共	2024年5月	看護科学研究22, 13-17	[著者]梶原友美,千葉理恵 レジリエンス概念の背景と関連概念をまとめ、最新の知見から精神疾患をもつ人のレジリエンスを支える関わりをまとめた。
4.調査研究から見えてきた精神科病院と身体科病院の連携における課題とその背景.	共	2023年11月	精神看護26(6), 525-528.	[著者]千葉 理恵,廣田 美里,林 佑太,梶原 友美,木戸 芳史, 谷口(梅田）麻希, 橋本 健志,野津 美由紀,石田 祐樹, 西脇 可織, 山口 玲子. ありまこうげんホスピタルとの協働研究により、精神科病院と身体科病院の看護師間の連携に係る課題について、精神科医療の利用者と看護師双方のインタビュー調査を行い、学会ワークショップ等での意見交換を行った。その結果を踏まえ、現時点での知見をまとめた。
5.身体合併症をもつ精神科入院患者が、身体科病院で円滑に治療を受けるためにどのように連携できるか：精神科・身体科の看護師、精神科医の経験をもとに.	共	2023年5月	日本精神保健看護学会第33回学術集会 WS	[著者]千葉 理恵, 梅田 麻希, 石田 祐樹, 西脇 可織, 橋本 健志, 木戸 芳史, 廣田 美里,林 佑太, 梶原 友美, 野津 美由紀, 山口 玲子. 身体合併症をもつ精神科入院患者が、身体科病院で必要な治療を受けるための課題について、これまでの研究において明らかになった知見を提示し、身体合併症をもつ精神科入院患者が身体科病院にスムーズに受診・転院するために、精神科医療職者と身体科医療職者がどのように連携していけるかについて参加者と話し合った。
6.体験参加型ワークショップ　すぐに役立つ　教育者・指導者向け暴力のKYT（危険予知訓練）	共	2022年6月	日本精神保健看護学会　第32回学術集会	[著者]的場 圭, 三木明子, 矢山 壮, 手嶌大喜, 梶原友美, 齋藤 雄一, 大谷 美希, 大谷 朋耶 精神科病院における暴力の危険予知訓練（KYT）を活用し、有害事象に発展した新人看護師が想定しておくべき場面を取り上げ、どうすればケアにつながる安全な方法になるか、ロールプレイを通して参加者とともに検討を行った。
7.Feasibility study of comfort with and use of sleep visualisation data from non-wearable actigraphy among psychiatric unit staff.	共	2022年6月	Psychogeriatrics 22. 764-766.	[著者]Odachi R,Yamakawa M, Nakashima K,Kajiwara T.,Takeshita., Iwase M., TsukudaJ., Ikeda M. 阪大病院との協働研究により、病棟へ非装着型アクチグラフを導入し、その効果を検証している。この研究では、その使用可能性を医療スタッフがどの程度関心を持ち、どのように使用されているかを調査した。
６．研究費の取得状況				
1.精神科入院患者の主体性に焦点をあてた実践を行うための看護師支援プログラム	共	2025年~2027年度	文部科学省科学研究費（基盤研究C）	[研究代表者] 梶原友美 [研究分担者]千葉理恵 本研究では主体性概念に着目し、精神科救急急性期病棟に入院する人々のリカバリー志向の看護支援プログラムを開発することを目的

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
６．研究費の取得状況				
の開発				とする。まず、システマティックレビューを行い、エビデンスに基づいた支援内容を明らかにする。その上で、精神科救急急性期病棟への入院経験者と精神科救急急性期病棟勤務看護師との協働により、本邦の医療現場で実践可能な支援プログラムを作成する。さらに、実際に病棟で働く看護師にプログラムを提供し、実施可能性や有用性について予備的な評価を行う。
2.精神科訪問看護師が実践しているひきこもり支援の実態と支援構造の明確化.	単	2023年度	笹川科学研究助成	[研究代表者] 梶原友美 ①精神科訪問看護師が実際に関わっている事例を調査し、その特徴の類似性や相違性からひきこもり者の分類を行い、②分類を基に、精神科訪問看護師が行うひきこもり者の背景や段階にあわせた支援構造を明確化することを目的とした。
3.JST次世代研究者挑戦的研究プログラム	単	2022年~ 2024年度	科学技術振興機構(JST)	[研究代表者]梶原友美 神戸大学「異分野共創による次世代卓越博士人材育成プロジェクト生」として、生活費と研究費の支援を受けた。
4.精神科急性期で非自発的入院を防ぎ当事者の主体性を支える支援の構造と関連要因の解明	単	2022年~ 2024年度	文部科学省科学研究費（基盤研究C）	[研究代表者] 梶原友美 精神症状の急性期に、非自発的入院/治療を避けたり、意に反した治療であっても当事者の主体性を脅かさないために、医療者が実施している「主体性」を支える支援について、その実態と影響要因を全国調査により明らかにし、本邦の精神科救急・急性期医療施設において「主体性」を支える支援を可能にするための指標を示すことを目的とした。
5.精神科救急外来での非自発的入院を防ぎ患者の主体性を維持するための支援方法の検討	単	2017年~ 2021年度	文部科学省科学研究費(若手研究B)	[研究代表者] 梶原友美 精神症状の急性期に、非自発的入院を防いだり、患者が可能な限り強制力を認識せず、主体性を維持するための行われている支援方法を実態調査をもとに検討することを目的とした。
6.身体面から働きかける補完代替療法導入のための精神科看護師への教育と普及方法の開発	共	2014年~ 2018年度	文部科学省科学研究費（基盤研究C）	[研究代表者] 遠藤淑美 [連携研究者] 梶原友美 身体面から働きかける補完代替療法を精神科看護に導入するために精神科看護師に対して実施する教育プログラムと普及方法を開発することを目的とした。
7.非自発的入院で患者の主体性の維持と治療導入の間でバランスをとるための看護援助指針	単	2013年~ 2014年度	研究活動スタート支援	[研究代表者] 梶原友美 精神科救急・急性期病棟への非自発的入院において、患者の主体性の維持と治療の遂行との上でバランスを取るための看護援助指針を作成することを目的に先行研究における、精神科救急・急性期病棟への非自発的入院初期の看護援助を、看護師、患者両者の認識から抽出した。

学会及び社会における活動等	
年月日	事項
1.2025年4月~現在	日本精神障害者リハビリテーション学会　第33回京都大会 企画委員会
2.2023年5月	第33回日本精神保健看護学会実行委員
3.2019年3月	第11回文化看護学会企画委員
4.2013年4月2019年3月	事例検討会